

高校生の主観的幸福感と友人関係の関連

— 学年の差に着目した検討 —

安達 悠子¹・山崎 起志²注1

(¹ 東海学院大学)

要 約

主観的幸福感と関連する要因の一つに対人関係が挙げられ、高校生を含む青年期に特徴的な対人関係には友人関係がある。そして青年期では友人関係が変化すると指摘されていることから、本研究では高校生 203 名を対象に友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について学年による違いを明らかにした。主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)と友人関係尺度(岡田, 1999)に回答を求めたところ、主観的幸福感尺度では「人生に対する前向きな気持ち」、「自信」、「人生に対する失望感のなさ」、「成果の認知」の4因子が抽出され、友人関係では「仲間への姿勢」、「友人との行動」、「笑いの獲得」の3因子が抽出された。多母集団同時分析から、1・3年生ともに「仲間への姿勢」は「自信」につながるが、1・2年生では「友人との行動」も「自信」につながり、3年生では「仲間への姿勢」が「人生に対する前向きな気持ち」につながることが示された。この結果は学年が上がるにつれて主観的幸福感に影響を及ぼす要因が「友人との行動」という外面的な側面から「仲間への姿勢」という内面的な側面へ変化することを示唆すると考えられた。ものの捉え方が主観的幸福感に果たす役割を生涯発達の観点から議論した。

キーワード：高校生、主観的幸福、友人関係

はじめに

主観的幸福感とその年齢別の値

幸せであることに對して人々は大きな関心を寄せてきた。心理学では幸せであることを主観的幸福感(subjective well-being)が高いことに置き換えることで研究を進めた。こうした動きは1960年代頃から始まり、精神障害のような人間のネガティブな側面だけでなく主観的幸福感のような人間のポジティブな側面にも焦点を当てようという心理学領域での流れに後押しを受けたり、生涯発達や精神的健康の文脈と連動したりしながら主観的幸福感の研究は展開された。その初期の成果の一部は、例えばWilson(1967)やDiener et al(1984)によってレビューされている。

主観的幸福感は年齢によって異なることが知られる。日本でそれを窺える調査として、2008年に全国の15歳以上80歳未満の男女を対象に行われた国民生活選好度調査がある。その中には「あなたは現在、ご自分のことをどの程度幸せだと思いますか」という問いがあり、この結果をもとに年齢による主観的幸福感を算出すると

15歳から80歳にかけては下降の一途をたどる(内閣府, 2008)。主観的幸福感を高く維持する上では、年齢が主観的幸福感に影響を及ぼす要因であるという理解にとどまらず、各年齢層で諸要因がどのように主観的幸福感に影響を及ぼすかを明らかにすることが必要であろう。

対人関係の影響と青年期の友人関係

主観的幸福感に影響を及ぼす重要な要因の一つに対人関係が挙げられる。国民生活選好度調査では主観的幸福度を判断する際の重視項目に家族や友人、地域などの対人関係が挙げられている(内閣府, 2011)。また例えばLarson(1978)は高齢者においては社会的接触と主観的幸福感の間に正の相関が見られることを報告しており、牧野・田上(1998)も専門学校生においては他者との交流の中で感じるや近しさ愉快さと主観的幸福感の間に正の相関が見られることを示している。

内閣府(2008)で対象とされた年齢層のうち下層は主に高校生に該当するが、高校生のような青年期で重要かつ特徴的な対人関係として友人関係がある。なお、友人や友だちとは関わりの持続する同年齢の他者と定義でき

る(中間, 2014)。青年期の友人関係として想定される集団はピア(peer)・グループと呼ばれ(保坂・岡村, 1986), ピア・グループにおいては, 互いの興味や関心が似通っているという共通性・類似性だけでなく, 互いに異なる部分を有することが認識され, 自他の違いを認め合いながら友人関係を育むようになることが特徴となる。中間(2014)によると, ピア・グループでの関係は自立した個人として互いに尊重し合ってもに在ることが出来る状態であり, 個性の違いこそがともに在る意義となる。実際に, 榎本(1999)はピア・グループの活動に相当すると考えられる互いの相違点を認め合い, 価値観や将来の生き方などを語り合う“相互理解活動”の得点を中学生, 高校生, 大学生を対象に調べ, 中学・高校・大学になるにつれて得点が高くなっていったことを報告した。また, 落合・佐藤(1996)は, 中学生, 高校生, 大学生を対象に友だちとのつきあい方の変化を検討し, みんなと同じようにしようとするつきあい方は中学・高校・大学になるにつれて得点が低くなり, 自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方は中学・高校・大学になるにつれて得点が高くなったことを報告した。このように, 青年期は友人関係が質的に変化する時期といえる。

人間関係を質的に捉えるという観点は主観的幸福感に及ぼす影響を考える上でも重要である。牧野・田上(1998)は専門学校生を対象に, 関わった相手をどの程度人間関係で心理的に近く感じているかという“接近度”, 相手との関わりがどの程度喜ばしい満足するものであったかという“愉快度”, 関わった人々はどの程度自分の要求や感情に反応を返してくれたかという“応答度”は, 最近どのくらい幸せを感じているかという主観的幸福感との間に有意な正の相関が見られたことを報告している。また, 内田・遠藤・柴内(2012)は大学生を対象にした調査で, つきあいの数とつきあいの質は人生への満足度にとっても重要であるが, 特につきあいの質への評価の影響が大きいことを示している。友人関係が質的に変化する中で, 友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響の過程もまた変化している可能性が考えられる。高校生で刻々と生じているであろうこの変化を如実に捉えるために, 本稿では主観的幸福感と友人関係との関連について学年の差に注目して明らかにしていく。

目的

高校生を対象に主観的幸福感と友人関係の関連について学年による変化を明らかにすることを目的とする。

方法

参加者および調査時期と手続き

九州にあるA高等学校に所属する高校生の男女203名を対象に2016年10月から11月にかけて質問紙を配布し, 184名から有効回答を得た(有効回答率90.6%)。内訳は1年生64名(男性37名, 女性26名, 不明1名), 2年生65名(男性41名, 女性24名), 3年生55名(男性35名, 女性20名)で, 平均年齢は16.5歳($SD=1.0$)であった。

質問紙

主観的幸福感: 主観的幸福感を測定するために主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)を用いた。この尺度は, 人生に対する前向きな気持ち, 自信, 達成感, 人生に対する失望感のなさの4因子を想定する各3項目の全12項目から構成された。回答は4件法で設問により選択肢の表現は異なったが, 全く幸せではない(1), あまり幸せではない(2), まあまあ幸せ(3), とても幸せ(4)などいずれも当てはまるほどに高い得点が付された。

友人関係尺度: 友人関係について数ではなく質を量的に測定するために友人関係尺度(岡田, 1999)を用いた。この尺度は, 内面的関係, 群れ, 気遣いの3因子を想定する各5項目の全15項目から構成された。回答は, 全く当てはまらない(1), 当てはまらない(2), やや当てはまらない(3), やや当てはまる(4), 当てはまる(5), 非常に当てはまる(6)の6件法であった。

手続き

クラス担任を通じて参加者に質問紙を配布し, 参加者は質問紙を家に持ち帰って回答した。質問紙は後日にクラス担任を通じて回収された。回答は任意, 匿名であった。本研究は東海学院大学研究倫理委員会による事前の承認を受けた(No. 2016-17)。分析にはPASW Statistics 18とHAD(清水, 2016)を用いた。

結果

尺度の確認

尺度の背景: 主観的幸福感尺度(伊藤ら, 2003)はその年代にも通用する尺度を目指して作成されたものであり, 大学・短大の学生およびその親である成人を対象に信頼性と妥当性が確認されている。また友人関係尺度(岡田, 1999)についても大学生を対象に安定した因子の抽出が確認されているが(岡田, 1995; 岡田, 1999), 両尺度に対して因子分析(重み付けのない最小二乗法, プロ

マックス回転)で構成因子の確認を行い、その後主観的幸福感と友人関係の関連を検討した。

主観的幸福感尺度: 主観的幸福感尺度については伊藤ら(2003)を踏まえて因子数を4に固定して因子抽出を行い、因子負荷量が複数因子に.30以上の項目を除いて因子分析を繰り返した。その結果を表1に示す。各因子のCronbachの α 係数は、第1因子から順に $\alpha = .84, .77, .68$ とある程度に高い値が示されて内的整合性が確認された。第1因子から第3因子を構成する項目は伊藤ら(2003)とほぼ共通していたため第1因子は「人生に対する前向きな気持ち」、第2因子は「自信」、第3因子は「人生に対する失望感のなさ(3項目すべてが逆転項目)」とし、第4因子は「成果の認知」と命名した。伊藤ら(2003)との相違点として、“q9 自分がやろうとしたことはやりとげていますか”が伊藤ら(2003)では「達成感」因子に含まれていたが、本研究では「自信」に含まれた。これはやろうとしたことをやりとげていることが自信につながっていたためと考えられる。また伊藤ら(2003)ではq9は“q7 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか”とあわせて達成感を構成していたが、本研究ではこれらがわかれてq7が単一項目で第4因子になった。達成感とは物事を行う過程と得られた成果のどちらからでも得られるが、q7は成果に重きをおいた表現になっていることから、第4因子は「成果の認知」と命名した。また、“q8 これまでのどの程度成功したり出世したと感じていますか”が項目から除外されたが、これは本研究の対象者が高校生であり即さない項目であったと考えられる。分析には各因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点として用いた。

友人関係尺度: 友人関係尺度も同様に岡田(1995, 1999)を踏まえて因子数を3に固定して因子抽出を行い、因子負荷量が複数因子に.30以上の項目を除いて因子分析を繰り返した。その結果を表2に示す。各因子のCronbachの α 係数は、第1因子から順に $\alpha = .77, .71, .77$ と高い値が示されて内的整合性が確認された。第1因子から順に岡田(1999)で示された気遣い、内面的関係、群れに該当する項目を中心に構成されていたが、第1因子には気遣いだけでなく、岡田(1999)では内面的関係に含まれた“q1 友達と真剣な議論をする”と“q9 友達とは、あたりさわりのない会話を中心だ”、群れに含まれた“q14 仲間から「つまらない人間」と思われたい気をつける”が含まれた。第1因子は「仲間への姿勢」と命名した。また、第2因子は岡田(1999)では内面的関係を構成した

項目だけでなく群れに含まれた“q13 1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする”が含まれた。友人との行動に関する項目と考えられたことから「友人との行動」と命名した。第3因子は岡田(1999)では群れを構成した項目のうち笑いの要素を含む項目のみが抽出されたことから、「笑いの獲得」と命名した。分析には各因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点として用いた。

学年別の主観的幸福感尺度と友人関係尺度との関連

主観的幸福感と友人関係の関連について学年の変化を明らかにするため、両尺度の各下位因子得点を用いて学年別にPearsonの積率相関係数を算出した(表3)。その結果、1-3年生ともに「仲間への姿勢」と「自信」に有意な正の相関が見られ、仲間への姿勢を確立していることが自信につながっている可能性が示唆された。また、1-2年生は「友人との行動」と「人生に対する前向きな気持ち」に有意な正の相関が見られ、友達に心を打ち明けたり、悩みを相談したりしながら深くかつグループでつきあうという形で友人と行動できていることが前向きさに繋がっている可能性が示唆された。特に2年生は「友人との行動」が「人生に対する前向きな気持ち」だけでなく「自信」や「人生に対する失望感のなさ」とも有意な正の相関が見られ、「友人との行動」が主観的幸福感の多くの側面と関連していることが示された。そして、2-3年生になると、気遣いを多く含む「仲間への姿勢」と「人生に対する前向きな気持ち」に正の相関が見られた。「友人との行動」と「仲間への姿勢」は因子間相関が高い因子ではあったが、学年を経ていくにしたがって悩みを相談するなどの深いつきあいから構成される「友人との行動」から気遣いや尊重から構成される「仲間への姿勢」が主観的幸福感に対して主たる関わりを持つように変化していく可能性を見出すことができる。

そこで、学年により友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響がどのように異なるかを検討するため、多母集団同時分析を行った(図1)。その結果、適合度はGFI = .992, AGFI = .947, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 149.008であり、十分な適合度を持ったモデルが示された。まず1-3年ともに「仲間への姿勢」が「自信」につながることが示された。そして、1,2年生では「友人との行動」も「自信」につながった。3年生では「仲間への姿勢」が「人生に対する前向きな気持ち」につながった。

高校生の主観的幸福感と友人関係の関連

表 1 主観的幸福感尺度の因子分析の結果

項目	1	2	3	4	M	SD
3 ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか	.916	.030	-.106	-.002	2.89	0.79
2 過去と比較して、現在の生活は	.868	-.024	-.087	.022	3.02	0.83
1 あなたは人生が面白いと思いますか	.516	.155	.281	-.049	2.69	0.90
4 ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか	.075	.715	-.115	.029	2.74	0.80
9 自分がやろうとしたことはやりとげていますか	.115	.671	-.121	-.108	2.98	0.71
5 危機的な状況（人生を狂わせるようなこと）に出会ったとき、自分が勇気をもってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか	-.104	.667	.097	-.029	2.39	0.91
6 今の調子でやっていけば、これから起きることにとも対応できる自信がありますか	-.083	.587	.239	.140	2.21	0.89
10 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか	.269	-.211	.681	.007	2.38	1.01
11 将来のことが心配ですか	-.192	.043	.669	-.094	1.70	0.84
12 自分の人生には意味がないと感じていますか	.150	.088	.532	.061	2.71	0.99
7 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか	.009	-.024	-.069	1.022	2.37	0.86
因子間相関	1	2	3	4		
	2	.414	—	—		
	3	.635	.517	—		
	4	.441	.290	.310	—	

注: q10, 11, 12は逆転項目。 q8“これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか”は除外。

表 2 友人関係尺度の因子分析の結果

項目	1	2	3	M	SD
2 友達の考えていることに気をつかう	.687	-.153	.062	4.42	1.09
7 仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう	.659	-.009	-.020	4.29	1.22
10 友達との約束は決して破らない	.572	-.050	-.054	4.62	1.15
9 友達とは、あたりさわりのない会話が中心だ	.551	-.177	-.012	3.97	1.25
14 仲間から「つまらない人間」と思われないように気をつける	.521	-.040	.055	3.67	1.64
3 仲間のためにならないことは決してしない	.488	.076	.005	3.82	1.31
8 自分を犠牲にしても友達につくす	.487	.289	-.121	3.62	1.45
1 友達と真剣な議論をする	.438	.068	.120	3.67	1.45
4 友達に心を打ち明ける	-.019	.840	-.017	3.69	1.58
15 友達に悩みごとを相談する	.086	.753	-.009	3.49	1.57
13 1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	.033	.499	.166	3.59	1.49
6 友達関係は浅い付き合いにとどめる	.251	-.462	.007	3.32	1.39
11 友達に冗談を言って笑わせる	-.030	-.012	1.013	4.13	1.41
5 ウケるようなことをする	.057	.060	.626	3.71	1.55
因子間相関	1	2	3		
	2	.530	—		
	3	.290	.308	—	

注: q6は逆転項目。 q12“仲間と一緒にいることが多い”は除外。

また下位因子間の双方向の関係を見ると、1,2年生は1年生で「成果の認知」と「人生に対する失望感のなさ」とに正の相関、1,2年生ともに「成果の認知」と「人生に対する前向きな気持ち」とに正の相関があり、後者については1年生では2年生よりもその相関は強かった。3

年生では「成果の認知」は「人生に対する失望感のなさ」とも「人生に対する前向きな気持ち」とも有意な相関は見られなかった。一方で、「人生に対する前向きな気持ち」と「自信」との間には3学年全てにおいて有意な正の相関が見られたが、その相関係数は学年が上がるにつれて

大きくなっており、3年生では特にその関連が強いことが示唆された。

これらをまとめると、1-2年生は「友人との行動」や「成果の認知」など直接的な行動や成果が「人生に対する失望感のなさ」や「人生に対する前向きな気持ち」につながるのに対して、2-3年生になってくると「仲間へ

の姿勢」を確立していることが「自信」につながることで、「自信」が「人生に対する失望感のなさ」や「人生に対する前向きな気持ち」と関連していることが考えられ、自立した認知（ものの捉え方）が主観的幸福感において果たす役割が多くを占めるように変化していくと考えられた。

表3 主観的幸福感尺度と友人関係尺度の下位因子間の相関関係

		仲間への姿勢	友人との行動	笑いの獲得
		4.23 (0.79)	3.70 (0.99)	3.92 (1.35)
1年生	人生に対する前向きな気持ち	3.05 (0.79)	.11	.27 *
	自信	2.63 (0.58)	.41 ***	.08
	人生に対する失望感のなさ	2.33 (0.79)	-.11	.12
	成果の認知	2.31 (0.81)	-.07	.09
		3.96 (0.79)	3.47 (0.81)	4.04 (1.26)
2年生	人生に対する前向きな気持ち	2.68 (0.71)	.31 *	.49 ***
	自信	2.51 (0.67)	.34 **	.25 *
	人生に対する失望感のなさ	2.25 (0.73)	.22	.33 **
	成果の認知	2.45 (0.87)	.19	.19
		3.82 (0.85)	3.38 (0.96)	3.77 (1.41)
3年生	人生に対する前向きな気持ち	2.87 (0.65)	.45 ***	.15
	自信	2.61 (0.66)	.39 **	.05
	人生に対する失望感のなさ	2.21 (0.72)	.16	.11
	成果の認知	2.35 (0.93)	.25	.06

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注：因子に隣接する値は、平均値(標準偏差)を示している。

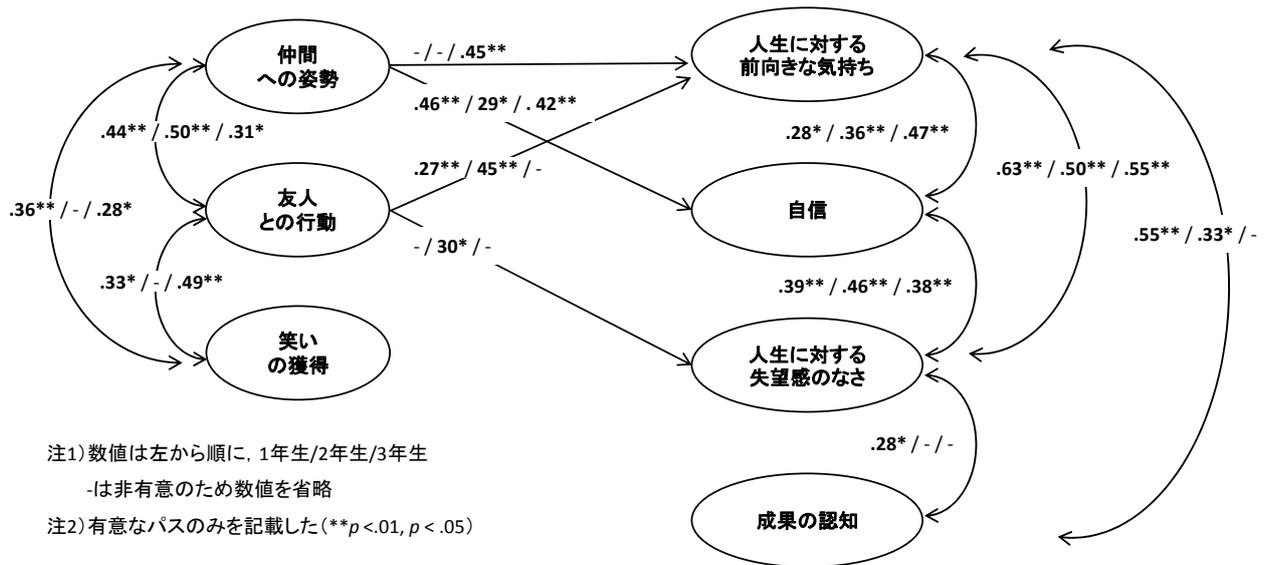


図1 友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響に関する多母集団同時分析の結果

考察

本稿は高校生を対象に主観的幸福感と友人関係の関連について学年による変化を明らかにすることを目的にした。その結果、学年によって主観的幸福感と友人関係との関連には一部違いが示された。友人関係から主観的幸福感への影響については、1・3年生ともに「仲間への姿勢」は「自信」につながるが、1・2年生では「友人との行動」も「自信」につながり、3年生では「仲間への姿勢」が「人生に対する前向きな気持ち」につながることを示された。この結果は学年が上がるにつれて主観的幸福感に影響を及ぼす要因が「友人との行動」という外面的な側面から「仲間への姿勢」という内面的な側面へ変化することを示唆すると考えられた。

こうした自立した認知（ものの捉え方）が主観的幸福感において果たす役割が多くを占めるように変化していくことは、青年期の友人関係が直接的な結びつきから内的な結びつきを形成することで互いが自立的な関係を築いていくこと（e.g., 落合・佐藤, 1996; 榎本, 1999）と同じ方向への変化と言えるだろう。またものの捉え方が主観的幸福感で重要になるということについては、例えば高齢者においては肉体的な衰えが生じて物事に対する感謝などものの捉え方（内面の充実）が変化することが主観的幸福感の高さにつながるということが知られている（e.g., 蔡, 2017）。主観的幸福感についての研究は発達段階でいうと老年学の領域でこれまでに多く行われてきたという背景から、肉体的な衰えが生じて主観的幸福感が向上あるいは高く維持されることを説明する要因としてもものの捉え方を見出された。しかし、高齢者だけでなく青年期においてもこうしたものの捉え方が主観的幸福感に影響を及ぼしているという可能性が本稿から示唆された。すなわち、高齢者における身体の状態（健康）や青年期における友人関係など要因の違いこそあれ、発達段階のより早期の段階から認知の変容が主観的幸福感に対して大きな役割を果たしている可能性が示唆されたことは、生涯発達の観点から見ても興味深い。青年期と老年期との間には長い壮年期があり、その期間においてもものの捉え方は主観的幸福感に影響を及ぼすのか、高齢期で見られる周囲への感謝というものの捉え方の変化は仲間への姿勢の確立というものの捉え方の変化と同列に扱ってよいかなどの課題は多いが、主観的幸福感において当事者のものの捉え方が果たす役割はさらに検討されるべきと考えられる。

謝辞

本研究はA高等学校関係者各位のご厚意により実施することができました。ご許可をくださった校長先生、調整くださった副校長先生、配布や回収をしてくださったクラス担任の先生方、回答くださったA高等学校の生徒各位に厚く御礼を申し上げます。

注

注1：本稿は第2著者が2016年度に東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した卒業論文を、第1著者が再分析し全面的に改稿したものである。

引用文献

- Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47(2), 180-190.
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討：ある事例を通じて 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74(3), 276-281.
- Larson, R. (1978). Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125.
- 牧野由美子・田上不二夫 (1998). 主観的幸福感と社会的相互作用の関係 教育心理学研究, 46(1), 52-57.
- 村田ひろ子・政木みき (2013). 中高生はなぜ“幸福”なのか—「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」から③— 放送研究と調査, 3, 34-43.
- 内閣府 (2008). 平成 20 年版国民生活白書 第 1 章消費者市民社会に向けた消費者・生活者の役割と課題 第 3 節社会の主体としての消費者・生活者～幸福の探求 1. 国民の幸福度 57-62.
- 内閣府 (2011). 国民生活選好度調査からみた幸福度. <http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryou/2shiryou/2.pdf> (アクセス日 2017/8/10)
- 中間玲子 (2004). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつ

- きあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43(4), 354-363.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47(4), 432-439.
- 蔡 羽淳 (2017). 百寿者の主観的幸福感：100 歳以上の高齢者はなぜ幸せか 生老病死の行動科学, 21, 45-52.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2012). 人間関係のスタイルと幸福感：つきあいの数と室からの検討 実験社会心理学研究, 52(1), 63-75.
- Wilson, W. (1967). Correlates of avowed happiness. *Psychological Bulletin*, 67, 294-306.

Relationship between subjective well-being and friendship among high school students by grade

Yuko Adachi and Takeshi Yamazaki

Abstract

Interpersonal relationships are one of the factors related to subjective well-being. Friendships are characteristic of interpersonal relationships in adolescents, including high school students, then it is pointed out that friendship changes in adolescence. This study proposed to clarify the difference in relationship between subjective well-being and friendships among students by high school grade level. We asked 203 students to answer the Subjective Well-Being Scale (Ito, Sagara, Ikeda, & Kawaura, 2003) and the Friendship Scale (Okada, 1999). As a result, four factors, including “positive feelings toward life,” “confidence,” “no disappointment feelings toward life,” and “recognition of achievement” were extracted in the Subjective Well-Being Scale; while in the Friendship Scale, three factors, including “attitude to fellows,” “behavior with friends,” and “acquisition of laughter” were extracted. After multiple group structural equation modeling analyses, it was discovered that in the first through third grades, “attitude to fellows” leads to “confidence,” but in the first and second grades, “behavior with friends” also leads to “confidence,” and in the third grade, “attitude to fellows” leads to “positive feelings toward life.” The results seemed to suggest that factors influencing the subjective well-being of students change from the external aspect of “behavior with friends” to the internal aspect of “attitude to fellows” as the grade level increases. We discussed the role of students’ perceptions in subjective well-being from the perspective of lifelong development.

Keywords: High school students, Subjective well-being, Friendship